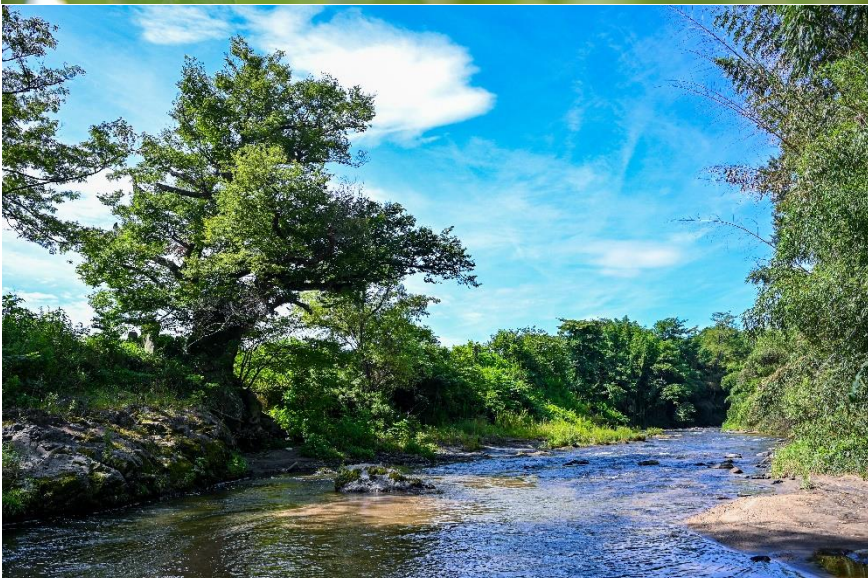


令和四年度

伊達市民憲章

作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「まもりましよう ふるさとの自然と歴史を」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて六百九十五点の応募がありました。ふるさとを大切に思う気持ちや地域の歴史や文化を継承していくことの大切さ、自然環境保全に対する強い思いなど、自らの体験をもとにしてまっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くのの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

【最優秀賞】

モモのふるさとを守る

伊達東小学校

六年

小野瑛士朗

7

【優秀賞】

もっと豊かな伊達市へ

伊達小学校

六年

唯野 柚月

8

大好き伊達市

栗野小学校

五年

佐藤 勇希

9

【優良賞】

自然豊かな伊達市

大田小学校

五年

長沢 健太

10

絹の里伊達市

保原小学校

五年

山下 紗奈

11

未来のももを守る

上保原小学校

五年

山田 一歌

12

つなげよう迫力の霊山太鼓

掛田小学校 五年 渡邊 蒼依

13

【佳作】

わたしの自まんのふるさと

伊達小学校 五年 小林 愛理

14

環境を守ろう、伊達市

柱沢小学校 六年 菅野 桃冴

15

歴史と伝統のある霊山神社

掛田小学校 六年 菅野 愛

16

ホタルが飛ぶふる里

小国小学校 五年 佐藤 凜

17

中学生の部

19

【最優秀賞】

小さな渦を大きなうねりへ

梁川中学校 二年 佐藤ゆうみ

21

【優秀賞】

私のすぐそばにあったもの

桃陵中学校 二年 鈴木 桜絵

22

自然に囲まれて

月舘学園中学校 三年 齋藤日向子

23

【優良賞】

守るべき伊達の歴史

梁川中学校 三年 佐藤 漣

24

誇りに思う伊達市

松陽中学校 二年 佐藤 空道

25

歴史を守る意味を考える

霊山中学校 二年 狗飼 梨央

26

伊達市の未来を守るためにできること

月舘学園中学校 一年 伊東 未徠

27

【佳作】

遊べる自然

伊達中学校 一年 小野 将

28

伊達町をつなぐ長岡天王祭

伊達中学校 二年 渡邊 裕奈

29

伊達のふるさと

梁川中学校 一年 菊池 凰聖

30

想いを守る

霊山中学校 三年 佐藤 琳

31

講評

審査委員長 二瓶 洋允

32

伊達市民憲章

34



小学生の部

最優秀賞

モモのふるさとを守る

伊達東小学校 六年 小野 瑛士朗

ぼくが住む伊達市箱崎地区は、春になるとサクランボの花、リンゴの花、ナシの花、そして、鮮やかなピンク色のモモの花と、果樹の花が次々に咲いていきます。ぼくの家は、代々続く農家で、果樹の苗木や実の生産、販売を行うのが仕事です。だから、うちの畑ではいろいろな種類の果樹が育っています。その中にはもちろん、モモの木もたくさんあります。

どうして、伊達市ではモモを育てている農家が多いのか、その歴史を調べてみました。伊達は元々、おかいこ様で有名な場所でした。それが、明治二十四年頃から、おかいこ様の代わりに伊達市の旧伏黒村、箱崎村、高子村でモモのさいばいを始めたようです。つまり、春になると伊達市がピンク色に染まるのは、もしかしたら、ぼくの前祖が苗木を植え、増やして、伊達市に広めたからかもしれません。ぼくも、伊達市の人々が大切に受け継いできた桃畑を、大切に守っていききたいという気持ちが生まれてきました。

どうすれば、先人が築いてきたモモのふるさとを生かすことができるのか。まずは、農家である父に話を聞いてみました。ぼくの家で育てているモモの中に、桃太郎の入っていたモモといわれる「天津桃」の古い木があります。天津桃は、頭の方にとんがりがあり、切ると真っ赤で、食べる

とすっぱいのが特ちょうです。普段、スーパーなどではあまり目にしませんが、昔から伝わっているモモです。父はこの天津桃を使って町おこしができるのではないかと考えているそうです。赤くてすっぱい天津桃は、天然の着色料になるので、加工品に向いています。その特ちょうから、父は天津桃のジャムを作ることに挑戦中です。真っ赤な色を生かして、白いTシャツを染めるのも、面白いかもしれません。

次に、ぼく達にもできることです。ぼく達は去年、学校で、総合的な学習の時間に伊達地区の果物について調べました。伊達地区の果物を守るために大切なこと、ぼく達が話し合って出した答えは、「伊達の果物をよりたくさんの人に知ってもらい、買ってもらうこと」です。そのために僕たちができることとして、果物売り場に置くポップを作りました。果物がおいしくなるようにどんな工夫をしているのかや、安心して食べられるように検査をしていることなど、インタビューしたり、調べたりして分かったことが書いてあります。今年の夏、そのポップは、学校の近くの直売所や「んめーべ」に飾ってもらいました。お店を訪れたお客さんは、そのポップを見て、伊達のモモがどうしておいしいのか、その秘密を知ってくれたと思います。

モモのふるさとを守るためには、農家の人だけでなく、ぼく達一人一人も、できることを頑張らなくてはなりません。伊達市みんなで、大切なモモを守っていきましょう。

優秀賞

もつと豊かな伊達市へ

伊達小学校 六年 唯野 柚月

私は自分のふるさと、この伊達市が大好きだ。桃を始めとしたおいしい特産物の数々、心の温かい地域の方々、疲れた心をいやしてくれる豊かな自然、そして先人のすごさを伝えてくれる歴史の宝庫。絶対に失いたくない、ずっと守っていききたいと強く思う。そのために、私たちは何をすべきなのか考えてみた。

まずは歴史に目を向けてみよう。旧伊達町には、斎藤彦内という人がいたことを、みなさんはご存じだろうか。私たち六年生は、総合的な学習の時間に、彼について学習した。何と彼のお墓は、私の家の近所の福源寺にある。実際にみんなで、お寺見学にも行った。彼が自分の命を投げうってまで、仲間の命を守る、正義を貫いた人だったことがわかった。だからこそ、『義民』という言葉が石碑にも書き記されている。今でも命日には、多くの方が供養にいらっしやるそうだ。これまでの長い年月の中で、どれだけ大切にされてきたか、お墓に屋根を設置していることからもうかがえた。私は、こんなにすごい方が近くにいらっしやったことを、正直何一つ知らなかった。とても恥ずかしく、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。ここまで大切に受け継がれてきた彦内さんの功績を、私たちの世代でなくしていいのか。いや、そんなことはできない。ではどうすればいいのか。

私たちにできること、それはこれから先も語り継いでいくことだと思う。初めて知ったときのあの感動を、彦内さんの尽力のおかげで今があることを、未来につなげる役目を担っていくべきだ。先人の方々がそうしてきたように。それには、私ももう少しくわしく調べていかなければならないなあと痛感した。

次に、豊かな自然に目を向けた。夏休み、旅行からもとどり、車窓から伊達市の風景を見たとき、自然に心がほつとした私。祖父母宅に行くといつも心いやされる私。なぜそういう思いにかられるのか。それを私は「緑パワー」のおかげだと思っている。理科の授業で生き物と緑の木々たちは、おたがいなくてはならない関係にあるということを学んだ。この緑が今もなお伊達市には数多く存在しているのはありがたい。それをこれからもずっと保っていくにはどうすべきなのか。

私は、植林活動を提案したい。もちろん植えただけで終わりではない。一本の木が大きく成長するには、何十年もの長い年月が必要だ。さらに、細やかな手入れをしなければならず、大変手間のかかる作業となる。口でいうのは簡単だが、覚悟も必要なのだ。ましてや、人手もほしい。現在新型コロナウイルスで失職した方が多いと聞く。そうした方々の救いの一つになるといいなあと心から願う。心が豊かになるばかりでなく、伊達市の経済もうるおってほしい。この伊達市が、未来に向けてますます輝いていくように、私もみんなに呼びかけ、できることを進めていきたい。

優秀賞

大好き伊達市

栗野小学校 五年 佐藤 勇希

ぼくの住む伊達市は、たくさん緑に囲まれていて、自然豊かな土地であふれ、とても住みやすい所です。一年を通して色々な野菜や果物が栽培され、特にきゅうり、あんぽ柿、桃の産地として知られています。きゅうりとあんぽ柿は日本一の生産量をほこっていて、農産物がおいしいところも伊達市のみ力です。

ぼくは桑折町で生まれ、三才の時に梁川町栗野に引っこしてきました。前に住んでいた町も好きだったけれど、今はもともとこの栗野が大好きです。

家の近くには阿武隈川が流れていて、その川ぞいにサイクリングロードがあります。そのサイクリングロードをお父さんと一緒に自転車で走る時間が、ワクワクしてたまりません。少し高くなっているサイクリングロードから下をながめると、季節によって色々な景色が楽しめます。春には、桃畑が一面に広がり、まるでピンクのじゅうたんがしきつめられたようになります。桜の花のあわいピンク色も素敵だけれど、桃の花の少しこいめのピンク色もとってもきれいで、春が来たんだなとうれしくなります。夏には、ちよつと太陽がしずんできてうす暗くなった頃のサイクリングがおすすめです。橋の街灯の明るさにつられて、カブトムシ、クワガタ

がたくさん集まってきました。今、ぼくの家で大切に飼われているカブトムシも、そこから一緒に連れて帰ってきました。秋には、土手でバッタやカマキリをむ中になって見つけるのも大好きです。冬には、うっすらと雪がふり積もった畑をながめながら、ピリッと冷たい空気の中散歩するのも大好きです。一年を通して、季節の移り変わりを肌や目で感じることで、栗野っていい所だなあいつも思います。

この前、いつもとは違う所をサイクリングしようということになり、家族みんなでレンタサイクルをしました。伊達市観光案内所で自分の好きな自転車を借りて、梁川町を自由に走ってきました。目的もなく細い道を走って行ったら、初めての場所に着きました。看板を見ると、梁川城跡と書いてありました。ぼくの住む梁川町に城があった事を初めて知り、とてもおどろきました。中世の庭園が本丸部に残っているのは、全国でも珍しいそうです。こんな由緒ある史跡は、これから大切に守り未来へ残していかなければならないと思いました。

ぼくの住む伊達市、そして栗野。近い将来で、十年後はどんな市になっているのかなあ。今よりもっとみんなから愛され、もっとみ力ある素敵な市になっていたらいいいです。そのために、今ぼく達にできる事は何だろうか。みんなが住みやすい市であり続けられるようみんな協力し、真剣に考え、努力していかなければなりません。みんなの力で伊達市の自然と歴史を守り、未来へ受けついでいきたいです。

優良賞

自然豊かな伊達市

大田小学校 五年 長沢 健太

ぼくが住んでいる所は、福島県伊達市保原町にある金原田という場所です。地名の通り、田んぼや原っぱ、山々の緑がとてもあざやかです。秋には、田んぼのいなほが実り、まるで金色にかがやくように美しく見えます。ぼくは、自然豊かな金原田が大好きです。

ぼくの家の周りは、畑で囲まれています。おじいちゃんとおばあちゃんが手入れをしている畑で、春にはじゃがいもやさやえんどう、夏にはトマトやなす、秋にはかきの実、冬は大根や白菜などの野菜や果物が収穫されます。とれたての野菜や果物は、みずみずしくて、とてもおいしいです。ぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんが作った野菜が大好きで、毎日食べています。体の中から元気になって、パワーがわいてきます。そのおかげか、かぜをあまりひかず、体もじょうぶです。

ぼくの家の南側には、おじいちゃんが手入れをしている山があります。春にはわらびやぜんまいがとれます。ぼくも、おじいちゃんと山菜をとったり、木の手入れをしたりします。おじいちゃんといっしょに季節の草花を見ながら、ゆつくりと山を登る時間が大好きです。山のてっぺんから見た伊達市の町なみは、緑がきらきらしていて、とてもきれいです。

ぼくが毎日通る通学路には、一面に田んぼが広がっている場所があり

ます。おじいちゃんが手入れをしている田んぼもあります。学校からの帰り道、田んぼの水の量を見たり、草かりをしたりしているおじいちゃんとおばあちゃんによく会います。

「健ちゃんお帰り。」

と言いながら、大きく手をふって笑う二人を見ると、うれしくなります。となりの田んぼで作業をしているおじいさんやおばさんも、

「お帰り、今日も暑いね。」

と声をかけてくれます。ぼくも、

「ただいま。」

と大きな声でこたえます。あいさつをすると、気持ちがよくなります。

ぼくは、自然が豊かで住んでいるみんなの気持ちややさしい金原田が大好きです。ぼくが大人になった時も、自然豊かな町であってほしいです。そのために、水を大切に使用したり、ゴミの分別やリサイクルをしたりなど、資げんを大切にします。ゴミのポイ捨てや川をよごさないように、家族や身近な人といっしょに気をつけます。

ぼくが、大人になったら野菜や米を作り、おじいちゃんとおばあちゃんや家族などたくさんの人に食べてもらいたいです。身近な人からいただいた、元気やうれしい気持ちをぼくも、みんなにたくさん分けられたらいいなと思います。そして、大好きな金原田の自然やみんなの笑顔を守り、広げていきたいです。

優良賞

絹の里伊達市

保原小学校 五年 山下 紗奈

伊達市は豊かな自然に囲まれ、お米や果物がとてもおいしい場所です。しかし、調べたり聞いたりしていると、伊達市にはもっと有名なものがありました。それは「絹」です。伊達市になる何百年も前からずっと絹が有名でした。その絹は、全国的にも有名で、天皇陛下にも差し上げていたものだそうです。

私は父から話を聞きました。今では見られなくなりましたが、父が小さかったころは、ひいおじいさんの家の屋根裏でたくさん蚕を飼っていたそうです。部屋一面に葉っぱが広げられており、そこに蚕がたくさんいたようです。ひいおじいさんの家だけではありません。周りの家でも蚕を飼っており、繭をつくっていたそうです。町には養蚕業と呼ばれる繭から糸をつくる場所も多くあったと聞きました。父から聞いた話で印象的なことがあります。それは、父が蚕の話をしていたときのひいおじいさんの言葉です。

「蚕はまだ。蚕さまはみんなの生活を支える大事な生き物だ。」
ひいおじいさんが蚕に「さま」をつけずに話していた父をしかったということにおどろきました。

蚕は桑の葉っぱを食べ、少しずつ糸を出して繭を作り出します。一つの

繭から一本ずつ糸を丁寧に取り出し、束ねていきます。親指ほどの大きさの繭から作られる絹糸はほんのわずかで、着物を作るために必要な繭は約二六〇〇個だそうです。それだけ貴重な繭からつくられた糸は絹として肌ざわりもよく、シルクとして着物やパジャマに使われています。しかし貴重な糸なので、値段も高く、なかなか買うことができません。私は祖母の家に行き、絹で作られたスカーフをさわってみました。すると、サラサラしており、とても軽く、「これが絹なのか」とその素晴らしさを実感しました。

現在の伊達市では、養蚕業を営んでいるところはほとんどありません。なぜ減ってしまったのか考えました。それは私たちが、値段が高く質の良い服よりも、安くて気軽に手に入る服を好むようになったからだと思います。私が普段着ている制服や運動着も外国で作られています。また日本の伝統的な着物を着る人も減っているのです。絹を使うこともなくなっているのだと思いました。

私は昔盛んだった養蚕業が、町のこれからの発展に必要なだと思います。歴史を守っていくためにも伊達市の養蚕業を復活させ、日本を代表する絹の産地にしてほしいです。普段使うものとして気軽に買えるわけではありませんが、絹の肌ざわりや着心地の良さをみんなへ広く伝え、日本の産業や伊達市を支えるものの一つになればいいなと思っています。父からの話で伊達市の守りたい歴史が見つかりました。ぜひポスターを作って、蚕の魅力を伝えたいと思います。

優良賞

未来のをもを守る

上保原小学校 五年 山田 一歌

私の住んでいる伊達市では、たくさんのもが作られています。私のじいちゃんとばあちゃんも、農家としてもを作っていました。農家の人たちはすごいです。夏の暑い時でも毎日欠かさずものお世話をしたり、収穫の時期には朝の四時くらいに起きて作業をしたりします。

うちのもは、すごくおいしいです。みずみずしくて、甘さと酸っぱさのバランスがとても良いです。がんばるじいちゃんとばあちゃん、そして伊達のおいしいもは私にとってほこりでした。

でも、そのもが食べられなくなってしまいました。じいちゃんとばあちゃんがもを作るのをやめてしまったからです。なぜかという、じいちゃんが病気になる入院してしまったからです。じいちゃんとばあちゃんはぶどうも作っているのですが、ももぶどうも続けるとなるとすごく大変です。私はすごく悲しかったです。大好きなうちのもが食べられなくなってしまうと、私も五年生になったら収穫を手伝うと約束していたからです。でも、そうやっても農家をやめなきゃなくなる人は他にもいると思います。

伊達市の農家の人数を調べたところ、年ごとにへっていることがわかりました。平成二十二年には五千四百二十三人だった総農家数は令和二

年には三千八百六十八人になってしまっています。逆に平均年れいはどんどん上がっていました。平成二十七年で六十七歳と農家の高い化が進んでいます。

だから、わかい人も農家になりたいと思うことが大事だと思います。農業の力は、作物を作るのが楽しいことだと思います。もちろん、大変なことも多いですが、それ以上においしいもが実った時の喜びは大きいと考えられます。また、様々な人に自分の作ったものを食べてもらい、喜んでもらえるのもとてもうれしいのではないのでしょうか。私のじいちゃん、ばあちゃんが作ったもを近所の人にあげると、とてもうれしそうな表情で受け取ってもらえました。あげたこちらまで幸せになれる瞬間を体験し、農家がいいなと思いました。これらの農業の力を若い人にも知ってもらい、若い人にも農業に興味をもってほしいと思います。私の将来の夢は学校の先生です。ですが、その仕事が終わったら、私も、じいちゃんとばあちゃんと同じ農家をしたしたいと思います。

伊達のおいしいもを守るために「まもりましよう ふるさとの自然と歴史を」この伊達市民憲章をかなえられるように、自分にできることをやっていきたいです。

優良賞

つなげよう迫力の霊山太鼓

掛田小学校 五年 渡邊 蒼依

伊達市には、各地域で行われる伝統の祭りがあります。私が住む霊山町にも、約三百五十年前から受けつがれてきた霊山太鼓をひろうする霊山太鼓祭りがあります。霊山町にある太鼓の組が集結し、太鼓をたたきます。私もその祭りのたたき手の一人です。

私は、小学一年生の時に太鼓を習い始めました。「じんく」という曲打ちから練習しました。青年団の方から「タンタコタンコ、タンタコタンコ。」と声に出しながら太鼓の中心をたたくことを教わりました。何度も何度も同じリズムをたたいて練習しました。時には、強くたたきすぎて、手がいたくなることもありました。思うようにたたけなくて、くやしいこともありました。でも、みんなの音が重なった時は、うれしくてたまらなくなりました。

今年、太鼓祭りが三年ぶりに開きいされました。二年間、できなかった練習が再開されると聞いたとき、とても楽しみな反面、曲打ちは覚えていたかな、大丈夫かなと不安でもありました。練習が始まると、ゆっくりではありましたが、たたけました。体が覚えていたようです。太鼓をたたく時の音やしん動が伝わってきて気持ちが高まる感じがしました。

三年ぶりの太鼓祭りは、伊達の小さい子どもからお年寄りまで、みんな

で盛り上がりました。霊山太鼓の各組からたくさんの方々が来て、色とりどりのはっぴを着た人たちが、きんちょうしたような表情で太鼓をたたきました。久しぶりに聞く太鼓の音は、なつかしく、いつまでもたたいていたいと思いました。

私は、太鼓を通じて考えたことがあります。伊達市のみんなが協力し、助け合い、伝統を未来につないでいきたいということです。

一つは、伝統を未来につなぐために私がすべきことです。太鼓は、楽しくはなく口伝えで教わり、体で覚える曲が多いです。私にはまだ分からない曲打ちがたくさんあります。それはたたかないと覚えられないし、みんなと合わせることもできません。私にできることは、曲打ちを覚え、それ後はいたちに伝えていくことだと思います。迫力の太鼓が続いていくよう、支えていきたいです。

もう一つは、伊達市のみんなの協力と助け合いです。太鼓祭りが開きいされると聞いた時、楽しみで仕方ありませんでした。そしてそれは伊達の方々の人の思いだと思います。つなげていきたい気持ちをこめて一生けん命太鼓をたたく人、その姿を楽しみに見に来る人があるから、太鼓祭りは多くの人に愛されているのだと思います。他の地域の祭りと同じです。だからこれから先、災害や人口減少などの課題があるかもしれないけれど、伊達の人々の思いをつなぎ、心を一つにする祭りを、守ろう、続けようという気持ちを伊達市の人みんなが持ち、一人一人にできることを考えてみてほしいです。

私は来年も思いをこめて太鼓をたたきます。

佳作

わたしの自まんのふるさと

伊達小学校 五年 小林 愛理

わたしは、小さいころ、父の仕事の関係で、茨城県土浦市や宮城県仙台市などに住んでいました。伊達市に引っこしてきたのは、五才の時です。

わたしが一年生の時の春、家族で伊達市内のドライブをしました。その時、道路ぞいの畑の木に、桜の花よりも濃いピンク色の花がたくさん咲いていました。それが桃の花だということを、その時父に教えてもらいました。桃の花を見たのはその時が初めてで、とてもきれいで感動したのを今でもはつきりと覚えています。

わたしの住んでいる伊達地域には、生産農家の方々が直接届けてくださる新せんな野菜や果物をたくさん売っている「んめくべ」という直売所があります。引っこしてきてわたしは、母とそこによく買い物に行くようになりました。

「んめくべ」に行くようになって、わたしは、伊達市ではたくさん野菜や果物が生産されているということを知りました。わたしは特に果物が大好きです。その中でも、桃が好きです。伊達市の桃の出荷数は県内二位だそうです。また、ひと言で桃と言っても、様々な品種があることを知ったのも、興味を持ったのも、「んめくべ」に行くようになってからです。例えば、伊達市で生産されている桃の品種は、有名な「あかつき」を始め、

「日川白桃」や「川中島白桃」など、全部で約二十種類以上もの桃が夏から秋にかけて生産、出荷されているそうです。

毎年、桃を食べると、あの時見て感動した桃の花を思い出します。そして、あの花がこんな美味しい桃になるまでには、農家の方々の苦労も言葉で言い表せないほどとても大変なんだろうなと思います。

わたしは、こんなに美味しい桃を他の県の人にもぜひ食べてもらいたいと思い、毎年欠かさず、仙台に住んでいた時の友達にも送っています。

わたしは、様々な種類の美味しい野菜や果物を作ることができる、自然豊かなこの伊達の地を、わたしたちの次の世代にもつなげることがとても大切だと思っています。

そのために、わたしはこのきれいな伊達の地を保ち続けることが重要だと考えました。例えば次のようなことをてい案します。

それは、「いただきます。」や「ごちそうさまでした。」を心からの感謝の気持ちで言うことです。今まで、わたしは何も意味を考えずに言っていました。しかし今では、直接農家さんにとどかなかつたとしても感謝の気持ちを常に表現することが大切だと思っています。

わたしは、自然豊かでおいしい果物などがとれるこの伊達市にめぐりあえてとてもうれしいです。わたしはこんな伊達市が、自まんのふるさです。また、世界中の人に伊達の桃を食べて笑顔になってもらいたいです。

佳作

環境を守ろう、伊達市

柱沢小学校 六年 菅野 桃冴

僕は伊達市が大好きです。だから、この大切な環境を守っていきたくいです。植物が生い茂り、緑がたくさんあり、虫たちが元気に飛びまわる、という豊かで素晴らしい環境はとても貴重だと思います。

そこで僕はどうしたらこの環境を守れるかを考えました。僕が一番はじめに思い浮かんだのは、『植物を植える』ことです。最近僕は、理科の授業で植物は二酸化炭素を取り入れ、酸素を出しているということを知りました。だから、家の庭にスペースがあれば、植物を植えることよいと思います。そうすると、庭がにぎやかになり、環境を守れることに協力できます。これは一人でできて、かんたんで、まねしやすいので大勢の人にしてもらいやすいです。そうすると、より結果がよくなります。それに大勢の人が庭に植えるとたくさんさんの家が緑でいっぱいになります。ということのは伊達市がより緑でいっぱいになり、この環境を守れるということになると思います。緑が増えるということは虫たちの居場所も増えるということなので、虫たちの環境も守れると思います。これをすれば、伊達市だけでなく地球全体の環境問題改善に取り組めます。

次に思い浮かんだのは、『ポイ捨てをしないこと』です。でかけるとポイ捨てされたペットボトルやプラスチックのふくろなどをみかけるとき

があります。テレビでゴミ、特にプラスチックのゴミが環境に大きないきょうを与えているということを知りました。伊達市にもポイ捨てされたゴミがあるのをみて、（皆がポイ捨てをしないためにはどうすればよいのか。）と思いました。皆がポイ捨てをする理由として、僕が思い浮かんだのは、ポイ捨てされたゴミが周りにある環境だから、ということです。周りにゴミが落ちていないキレイな環境だと、ポイ捨てをすることへの罪悪感を感じます。でも、周りにゴミが落ちている環境だと、皆もポイ捨てをしているからと思ってしまう、罪悪感は軽くなったように感じてしまいます。だから僕は、歩道に空いているスペースがあれば、植物を植えるといいと思います。花が咲き乱れているキレイで美しい環境だと、ゴミを捨てることへの罪悪感を感じるため、ポイ捨てをしないと思います。

これら二つのことを実行して、伊達市の環境を守っていききたいです。この豊かで素晴らしい環境が大好きなので、守り継いでいき、いつまでもこのままできてほしいです。伊達市の緑豊かな土地がさらに緑でいっぱいになり、ポイ捨てをする人が減って、落ちているゴミが無くなってキレイになることを願っています。貴重なこの環境を守るために僕は他の対策のことも考えていこうと思います。

佳作

歴史と伝統のある霊山神社

掛田小学校 六年 菅野 愛

私が住んでいる霊山町の大石には、明治十四年に創建された、歴史ある「霊山神社」があります。この霊山神社は、「別格官弊社」という社格の神社で、調べてみると、福島県にはこの格の神社は、霊山神社ただ一つだと分かりました。私たち地域の住民にとっても自慢できる神社です。

この霊山神社では、春季例大祭と秋季例大祭が行われ、無形民俗文化財にもなっている伝統的な舞が奉納されます。それは、「らんじよう武楽」や「北又獅子舞」などで、どちらも三百年以上の歴史があります。他にも伝承されてきた伝統芸能があります。

今年の春季例大祭は、三年ぶりに観客を迎えて行うことができました。コロナが流行してからの二年間は、一般の方は参拝できませんでした。見に来られなかった方たちが、「今年は観たい」と思っ来てくださったことが、とてもうれしかったです。大石の地域の方にも、他の地域の方にも、私たちが舞う姿を見てもらうことができ、心から良かったなあと思いました。私も、伝統あるお祭りに参加することができ、誇りに思いました。

しかし、今年は、北又獅子舞をひろうすることができませんでした。二年前は、小学生七人で獅子舞を舞っていました。けれども、踊っていた小

学生が中学生になり、新入生が入って来なくなりました。私の家の近所には、今は一緒に遊べる友達がほとんどいません。そのため、獅子舞を続けることが難しくなっていました。以前は、週に一回練習し、春には霊山神社に、夏には日枝神社という大石地区の神社に、獅子舞やらんじよう武楽を奉納してきました。秋には、家々を周り、奉納してきました。三年以上続いてきて、私も小さいころから観てきた伝統芸能が、もうできない、観られないと思うと、とても悲しく、さびしい気持ちになります。

でも、私は、伝承する子どもがいなくなっても、いろんな人に大石の北又獅子舞などの伝統芸能を忘れてほしくありません。一人でも多くの人に知ってもらいたい、この伝統芸能を残していきたいと思っています。

霊山には、他にも昔から受け継がれてきた「霊山太鼓」や「棒術」などの伝統芸能があります。「霊山太鼓まつり」は、今年三年ぶりに行われました。私も地域の人たちと一緒に太鼓をたたきました。やはり、みんなで集まり、ひとつになって太鼓をたたくと、なんともいえない迫力があり、楽しくて、三年分の思いを込めてたたきました。

私は、霊山、そして私の住んでいる大石地域には、すばらしい伝統芸能がたくさんあることをたくさんの人に伝え、できるだけ長く受け継いでいきたいと思っています。私が中学生になっても、地域の人たちと、今取り組んでいる霊山神社とらんじよう武楽を守っていきたいです。

佳作

ホタルが飛ぶふる里

小国小学校 五年 佐藤 凜

私は、毎年六月の末になると、祖父とホタルを探しに近所の川辺に行きます。今年も、祖父母をさそい、ホタルを探しに行きました。

農道に入って、少し歩いて行くとフワ〜つとやさしい光が見えました。毎年、このやさしい光を見つけるしゅん間が大好きです。祖父が、「台風や工事などで川がにごっていたりするとホタルは生息しないんだよ。」

と教えてくれました。ホタルは静かできれいな水を好みます。えさとなるカワニナという貝がいる所に生息するそうです。今年は、川の水がにごっている日も多かったので、ホタルが少ないのかと心配になりましたが、四五ひきつかまえることができました。

よく日、つかまえたホタルを学校に持って行ってみんなで鑑賞しました。

「先生も、小学校の時におばあちゃんとホタルを探しに行ったの。思い出すなあ。」

と、担任の先生もなつかしそうにホタルを見ていました。

近所に住んでいる友達も、ホタルを見に行きたいというので、場所を教えてあげました。すると、友達のお父さんやお母さんまでいっしょにホタル

ルを探しに来ていました。その日は、家の前の用水堀におどろくほどのホタルが飛んでいました。

「きれいだね。」

「きれいだね。」

みんながその光に見とれてだまってしまいうほど美しく、まるで、イルミネーションを見ているようでした。

ホタルの生息について、調べてみたくなったので調べてみると、ざんねんながら、全国的に川の改修工事や、アスファルト化が進んだせいで、今、ホタルが見られる所が少なくなっているそうです。地域によっては、地域のみんなでホタルを守る取り組みをしている所も多くなっているようです。それを知って、自分の住んでいる町がこんなに自然に恵まれた素晴らしい所なのだとは思ってもいませんでした。そして、自然は、生物や植物にとつてなくてはならないものだという事も分かりました。

これからは、ホタルが飛ぶ霊山町の自然に感しゃして、私達が大人になった時も、今と変わらずにずっとホタルが見られるように、自然を守っていかねければならないなと思いました。そのためにも、川の水をよごしたり、ゴミのポイ捨てをしたり、環境をこわすことをやめ、みんなで美しい自然を守っていけるように呼びかけていきたいと思います。一人一人ができることは小さいことかもしれませんが、それがたくさんの人に広まり、みんなで取り組むことができれば大きなことになると思います。来年も再来年も、そして未来でも、たくさん美しいホタルが飛びかう、すばらしいふるさとにしていきたいと思います。



中学生の部

最優秀賞

小さな渦を大きなうねりへ

梁川中学校 二年 佐藤 ゆうみ

「行ってきます。」

家の玄関を一步踏み出すと、春には少しピリツとした空気の中に、梅の花がポツポツと咲き始めようとしている優しい気配。初夏には、学校へ向かう道にある桜並木の若葉が生い茂り、ムツとした空気をいっぱい溜めこみ、一気に爆発させたがっている、いたずらっ子のような気配。夏本番には、我こそが王様だと言わんばかりの、どこの地域より力強い熱気。秋には、オレンジ色の柿の実がたくさん的小屋や軒下にぶら下がり、見るものを圧倒するような輝きを放つ。冬には、凍てつく寒さにちよつと怯むけど、背筋が伸びるような緊張感とこの地域の冬の匂い。私は、そんな伊達市の風景が好きだ。

そして、学校に向かう道では見守り隊や地域の方がたくさん声をかけてくださる。学校の行事を知ってくださいっていて、私は吹奏楽部なので出ないのだけれど、

「中体連がんばってね。」

などと声をかけてくださる。出ないけど、

「頑張ります。」

と答えて自然となんだか嬉しくて笑顔になれる。そんな人があたたかいところも大好きだ。

伊達市の市民憲章を読んでもみると、ほとんどが、私が日常でよく体験し、実感できている気がした。だが、よくよく考えてみると、それは私ではなく他の誰かが優しさと思いやりを持って発言し、行動してくれていたことを、たまたま自分が受け取ったにすぎないことに気がついた。朝、いつもゴミを拾ってくださる方や、声をかけてくださる見守り隊の方。私の大好きな花やこの町の風景を守るために手入れをしてくださっている方。そういったたくさんの方が、人や町が輝くよう頑張ってくれていることに初めて気がついた。

それを思った時、私もこの伊達市の一員として何かできることはないかと考えた。とりあえず手始めに、散歩の際に自分の家の近くの川の側のゴミ拾いしてみた。始めてみると、案外ゴミは多く、すぐにゴミ袋がいっぱいになった。これでは、川の水を汚し、いろいろな生物や植物の命を脅かし、私の大好きな風景をうばってしまうのではないかと恐ろしくなった。

私一人の力では、四十五リットルゴミ袋一つが精一杯だったが、これを家族や身近な人に話し、連携し、町にゴミが出ないようにするにはどうしたらいいか、ゴミを捨てさせないには何ができるかを考え、この小さな渦を少しでも大きなうねりに変えて、少しでもゴミを減らしていけるよう、一步一步行動に移していけたらと強く思った。

そしてそうした一歩が広がっていけば、伊達市の自然を守ることになり、それがこの町に住む人々のあたたかさや優しさ、伝統、文化をずっとずっと守っていくことにも繋がっていくのだと信じた。

優秀賞

私のすぐそばにあったもの

桃陵中学校 二年 鈴木 桜絵

伊達市の魅力とは何か。そう聞かれたら私はきつとうまく答えられないと思う。私はそれほど自分が住んでいる伊達市を知らなかった。どこにでもあるような普通の町だと思っていた。でも、ある時からそれは私のただの勘違いだったことに気がついた。

私は中学一年生の頃から生徒会に入っていた。生徒会ではさまざまな活動をしている。地域のゴミ拾いボランティア、朝のあいさつ運動。その中に桃プロジェクトという活動がある。それは、地域の桃農家さんの桃作りを手伝うというものだ。桃の摘蕾や摘果、その摘果した桃や収穫した桃の商品開発の考案。私が手伝ったのはこれくらいだが、本当はもっと作業が多くて、もっと大変なのだと思う。

そして、何度か桃作りを手伝い始めて、この桃一つ一つにたくさん人の手が携わっているのだと気がついた。向こうに見える桃畑も、通学路にある田んぼや畑も。伊達市の自然豊かな恵みにはたくさんの人達の思いが、願いが込められている。だからこんなにも美味しいものができるんだ。そう考えると、私は何てすごいものを食べて生きているんだろう、なんてすごいことに関われているんだろう。自然と私の胸にありがたみが広がった。

私の祖父母は家の畑で野菜や果物を作っている。きゅうり、なす、キウイ、スイカ、他にもたくさん。だから毎日のようにそれをもらって、ほぼ毎日のようにそれを食べている。

ある時、父が言った。

「毎日こんなにたくさん新鮮な野菜を食べて幸せ者だね。ばあちゃんと同じやんに感謝しなきゃだよ。」

その言葉は私の胸にすんと、いとも自然に落ちてきた。確かにそうだなかなか簡単にできることではないと思う。伊達市は豊かな作物が取れる恵まれた土地なのだろう。

ああ、何だ。私がただ知らなかっただけで、こんなにも伊達市は自然に溢れているんだ。風に揺れる緑色の稲穂。桃色の花をつけた桃畑。伊達市を囲むようにした山々。その間から流れる煌びやかな川。

そしてこの町は昔、蚕様がはく糸で作った布や着物などが有名だった。それは全国的に知られているもので、社会の歴史の授業の際に先生が教えてくれた。前々からこの町が養蚕やニットで有名だったことは祖母から聞いたことがあるが、これほどの規模だとは知らず、初めて聞いた時は驚きの半面、どこか誇らしげな気分になっていた。

今、私が伊達市の魅力とは何かと聞かれたら、迷わず答えることができる。新鮮な野菜、綺麗に色づいた桃。養蚕や織物の歴史。本当はきつと私のすぐそばにあったもの。あたりを見渡せばそこら中に伊達市の魅力はころがっていたのだ。私は、この伊達市の魅力がいつまでも残るよう、自分には何ができるのか、何をしたらいいのかを考えていきたい。

優秀賞

自然に囲まれて

月舘学園中学校 三年 齋藤 日向子

私の住んでいる月舘町は、自然がとても豊かで美しい場所です。一年中飽きません。春は、色とりどりの花々と鳥のさえずり。夏は青々とした月舘町の森林と満天の星空。秋は柔らかな風を運ぶ金木犀と紅葉。冬、一面真っ白に染まる雪景色。私は、月舘町の自然をとっても気に入っています。特に、梅雨の時期にしか見られないあじさいが美しいと思います。真っ青な快晴に映えるあじさいも素敵ですが、梅雨らしく、雨の日に雨水を受けているあじさいも趣があります。

そして、何より重要なことは、このような自然を守ってくれる地域の方がいるということです。一昨年と昨年は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために実施されていませんが、月舘町では「あじさい祭」を行っています。「あじさい祭」の会場に着くまでの道には低木で「あじさい小径」が作られます。その道は、常に地域の方が丁寧に手入れをされていて、いつ見てもきれいに整えられた状態です。私の家は「あじさい小径」までの途中にあるのですが、咲いているあじさいの様子を写真に収めている人があるのを見かけると、私が手入れをしているわけでもないのに、誇らしい気持ちで、とても嬉しくなります。

また、星がきれいに見えるところも月舘町の良いところだと思います。月舘学園中の学区はとても広く、山裾や田んぼの近く、山の上など、みんないろいろなところに住んでいます。どの地区も、街灯などの人工的な光が少ない点が、自然の美しさを感じさせる大きな利点だと思います。交通の不便さや大きなショッピングモールなどの施設がないことに対して不満に思う人がいることも事実ですが、そのおかげで、本来の星の美しさを感じることができているのだということに気付くと、とても尊いものに感じます。

私たちは、幼いときから「自然を大切にすること」を教えられてきました。その気持ちを教えるだけでなく、今までもち続けられるように育ててくれたのは、地域の人々が支える、美しい環境のおかげだと思います。

決して、買い物や通学に便利な地域ではありませんが、それ以上に大切なものがたくさん残っている地域です。みんなが「自然を大切にする」という気持ちを持ち続けられるかどうか、これからの伊達市に必要な考え方ではないでしょうか。

伊達市の自然や伝統的な文化、桃や柿などの果物やお米などの農作物を、すべて一まとめにして地域の「特産物」として捉えることで、一人ひとりが地域の歴史や自然の魅力を理解することができるのだと思います。魅力を感じることができれば、それらを大切にしたいという願いが、世代を超えて受け継がれ、地域を超えて広がっていくのではないのでしょうか。

優良賞

守るべき伊達の歴史

梁川中学校 三年 佐藤 澤

私達が住む伊達市。伊達市には、豊かな自然と受け継がれてきた歴史、文化がある。それらを守り、次の世代へと受け継いでいくことが大切である。

皆さんは知っているだろうか。伊達市と北海道松前町は姉妹都市であること。伊達市の中でも梁川町とは深い関わりがあることを。そして今は松前中学校と梁川中学校の生徒会が交流事業を行っている。この事を聞いて私が一番に思ったことは「何故」だった。松前と梁川の歴史について気になったので、インターネットを利用したり、周りの人に聞いたりして調べてみた。

すると、松前藩は二百年程前、十四年間梁川に移封されていたそうだ。その縁により、松前と旧梁川町の間で姉妹都市提携が結ばれた。その歴史を引き継ぎ、平成二十三年新たに松前町と伊達市の間で姉妹都市提携が結ばれた。この事について知った時不思議な気持ちになった。二百年前に起こったことが長い間、松前と梁川の色々な人達によって、今日まで受け継がれてきた。とても嬉しいような誇らしいような気持ちになった。

私は今年度の松前中学校と梁川中学校の生徒会交流事業に参加し

た。互いの中学校同士仲を深めて有意義な交流をすることができた。この交流事業を通して、これ程遠くにある町同士に繋がりがあるということに強く実感が湧いた。また、松前と梁川の歴史をこれから先も受け継いで、この交流事業も続けて欲しいと思う。

そのためには、まず私が住んでいる梁川町をより多くの人に知ってもらうことが必要である。だが、松前との歴史や交流事業について知っている人は少ないと私は感じる。現に、家族や友人にこの事について聞いてみると「知らない」と答える人が殆どだった。私自身も最近知ったことだ。始めは、中学校の生徒や友人などに、会を開いて松前との歴史や交流事業について説明したり、ポスターを作成して掲示したりして、少しでも知ってもらうことが大切だと思う。誰か一人から、友人や家族へと広まることができれば、次の世代へと受け継いでいくきっかけができると私は思う。一人一人が歴史を守り継ぐ一人なのだと誇りを持ち、努力していくことが大切だ。

勿論、梁川町だけでなく、それぞれの地域に守るべき歴史や文化、伝統がある。それらを次の世代へ次の世代へと途切れることなく受け継いでいくために、どのように努力をしていくか、一人一人考え、働きかけていく必要があると思う。

優良賞

誇りに思う伊達市

松陽中学校 二年 佐藤 空道

私の誇りに思う事の一つは「伊達市」の名称です。

今年は夏の甲子園で聖光学院野球部が初めて準決勝に進みました。選手たちの袖には大きく「伊達市」の名称が刺繍されています。他の高校に市の名称が入っている高校はありません。だから全国でも「伊達市」の名称が認識されたのではないかと思います。このことはとても誇らしく、うれしいと思いました。

私は生まれた時から伊達市民ですが、「伊達市」の名称は十五年くらい前からというのを最近知りました。伊達郡の五つの町が合併して「伊達市」になったとのことだそうです。なぜ、その時「伊達市」という名称にしたのでしょうか。「伊達」と言えばやはり伊達政宗を思い出す人が多いのではないかと思います。そのルーツはこの伊達市にあるそうです。私の家の近くに伊達神社という神社があります。なぜ伊達神社なのか神主さんに聞いたところ、この神社は西暦約八五〇年頃に「伊達明神」の名で建造され、その後明治頃に今の「伊達神社」になったと言っていました。伊達氏の発祥が鎌倉時代なので「伊達」の地名があつての「伊達氏」であることが分かります。それが脈々と受け継がれて、今の「伊達市」となっていることは、この地方の人々の中に「伊達」という名称の誇りがあつて、それが「伊達市」の名称

につながっていると思います。私はこの「伊達市」の名称を使って全国から人を呼び寄せられることができると思います。

伊達市には、存在する伊達氏関連の歴史的な建物や場所がたくさんあるはずです。全国や世界の中でも伊達氏の歴史に興味がある人たちがたくさんいると思います。その人たちに「伊達」の名に恥じない、自然や桃などをはじめとするフルーツの素晴らしさを伝えることができる、さらに伊達を好きになつてもらえると思います。そして、それがつながっていけば、世界中に伊達市のファンができるのではないかと思います。今はインターネットが普及し、SNSで情報をいろいろな人に簡単に発信できます。私ができることとして、この伊達市の自然や歴史、人のあたたかさなどを少しずつ発信していけたらと思います。

親戚や知り合った遠くの人、「伊達」でつながっている日本や世界の人にもっと伊達市のいいところを紹介していきたいと思っています。

そのためにも伊達市のいいところを自分なりにもっと探し歩いてみたいと思います。「伊達」の歴史や自然でつながる多くの人が「伊達市」を、誇りに思う心を広げていけたら、もっと伊達市はいいところになると思います。

私の同級生も高校卒業後に伊達市外に行つてしまう人達がいます。私はそれでも伊達に住み続けて、同級生たちにも伊達の魅力を伝え続けていきたいと思っています。

優良賞

歴史を守る意味を考える

霊山中学校 二年 狗飼 梨央

「伊達市の自然や文化に何がある？」

そう聞かれて答えられない人はほとんどいないだろう。それくらい伊達市には、魅力がたくさんある。

そこで私は、伊達市の自然や文化について名前だけ知るのはなく、歴史から知ることにした。

まず始めに「霊山太鼓」。霊山太鼓は、一六六一年から一六七三年の江戸時代寛文年間に始まり、今では三五〇年以上の歴史をもつ。伊達で独自の発展を遂げ、現在まで継承されてきた。この霊山太鼓が活躍する大イベントが「だてな太鼓祭り」だ。だてな太鼓祭り、という名前ではあるが伊達じゃない。太鼓を見る側、叩く側、どちらにしても味わえる会場の一体感を、ぜひ一度は体感してみてほしい。

二つ目は「福島りようぜん漬」。福島りようぜん漬の漬け物は六〇年作り続けられているそうだが、名前の由来は今から七〇〇年前、南北朝時代の漬け物に関する話からきている。このことから、霊山漬けの本当のはじまりは南北朝時代だったのかもしれない、と考えるとおもしろい。りようぜん漬の魅力は味だけではない。とうちゃん漬やかあちゃん漬など、他にはない商品名にひかれた人もいるのではない

だろうか。私は、このような名前を発案できる人もすごいと思った。

最後は「霊山」だ。霊山は、古くは霊山寺、南北朝時代には霊山城として長い歴史をもつ。標高は八二五メートルと、登山しやすい山でもある。私は学校行事で一度霊山登山を経験した。未経験者でも子供でも簡単に、安心して登山をすることができるようになっていた。さらに、登り切ってからはもちろん、登山途中でも見ることで絶景は、言葉を失うほどに美しい。登山を終えた達成感が合わさると、より一層の感動がうまれる。

伊達市にある、様々な自然や文化の中の三つについて知ることができた。自分で調べたり、家族や地域の方々に聞いたりすることによって、歴史まで学べた。しかし、歴史を知れるということは、当たり前のことではない。なぜなら、三五〇年以上前に生きていた人達は現在いないのだから。つまり、伊達市にうまれた文化を、現在まで多くの人々が受け継いできたのだ。もしその人々がいなければ、私達は歴史を知ること、そもそもそのような自然や文化が存在していたことを知らないままだったかもしれない。

私達は、伊達市にある自然や文化を知り、歴史を学ぶことができる。次は、歴史を受け継いできた人々の努力を無駄にすることのないよう、自分が知るだけで満足せず、私達が次の世代に伝えていく番だ。ふるさとの自然と歴史について知り、次に伝えるまでが、本当の「守る」という意味になるのではないかと、私は考える。

優良賞

伊達市の未来を守るためにできること

月舘学園中学校 一年 伊東 未徠

伊達市は、とても自然豊かなところです。僕が以前、親戚のおじさんの家に遊びに行ったとき、窓から見える景色は、隣の家の壁でした。一方で、僕の家、自分の部屋の窓からは、きれいな山並みを見ることがができます。比べてみると、住んでいる家の窓から、豊かな自然を感じることができなのは、とてもいい沢なことだと考えました。伊達市には山や川など、自然を感じることでできる場所が、たくさんあります。僕たちは、そのような場所を守っていかねばならないと思います。

また、歴史的な文化財もたくさんあるのが、伊達市の良いところです。小学生の見学学習で、「旧亀岡住宅」に行ったことを思い出しました。月舘町にも「十六羅漢像」や「薬師如来像」「堂の脇乳銀杏」などの文化財があります。学校には、先輩が月舘町の文化財について総合学習で調べたレポートが壁に掲示されていて、とてもたくさんの文化財があることがわかります。自分で調べてみると、伊達市には百近くの指定文化財があることもわかりました。また、まだ未登録の歴史文化財もあるそうです。しかし、市や国で定められた文化財ならば、市民以外のいろいろな人に興味をもってもらえると思います。

そこで僕は、たくさんの自然や文化財を守るためには、それらをよく知

ることが大切だと考えました。例えば、伊達市には、月舘の「上手渡の小志木神社」「布川の熊野神社」などで行われる獅子舞や、霊山の剣舞である瀬鵬武楽など、地区ごとのお祭りがたくさんあります。お祭りも文化財の一つとして考えると、「知ること」が伝統や文化を守る手段だと言えます。しかし、昔から続いているお祭りの中には、人手不足や参加者の不足で開催が難しくなったり、なくなってしまうものもあるそうです。人手や参加者がいないということは、お祭りを受け継ぐ人がいないということに直接結びつき、とても危険な状況だと思います。

確かに、伊達市内、特に月舘や霊山地区は、若い人や子どもが少なくなっていると聞きます。学校の児童・生徒数も少なくなっています。しかし、若い人や子どもの数に関係なく、地区の自然や文化財に無関心になっていく人も多いのではないのでしょうか。

特に、月舘や霊山地区の強みは、おじいさんやおばあさんと暮らしている子どもが多いということです。おじいさんやおばあさんから、地区の伝統や文化を受け継ぐという気持ちをもつことが、歴史を守ることにもつながるのではないのでしょうか。

文化財や自然の保護というと、僕たちのような子どもでは、できないことがたくさんあります。しかし、自然や文化財を知ることが、年齢に関係なく誰にでもできることです。身近にある自然や文化財に関心をもつことが、未来の伊達市につながっていくと思います。

佳作

遊べる自然

伊達中学校 一年 小野 将

僕は、よく虫取りをします。場所は、公園から山まで様々です。そんな時、よく「伊達に住んでよかったなあ」と思います。それは、虫取りができる自然豊かな公園がたくさんあるからです。

僕が住んでいる伊達市伊達町には、公園がたくさんあります。そして、昆虫が集まるブナ科の木がある公園もかなりあります。僕は、そこでたくさん虫取りをしました。僕はカブトムシが好きで、友達はクワガタムシの方が好きです。どちらも捕まえることが出来るので、友達と一緒に遊ぶことができます。様々な虫がいるということは自然が豊かだということです。

友達と一緒に虫取りをして自然の中で遊ぶことはとても楽しいです。自然豊かな公園や山で遊んでいると、たくさん話をするし、協力して虫を見つたり捕ったりしたときに、みんなで喜びを共有することが出来ます。また、伊達町の公園は、囲いが低木で周りから見えるので、何かあっても安心という気持ちで遊ぶことができます。

中学生になって、自分で行動できる範囲が広がりました。今までは近くの公園でしか遊んでいませんでしたが、愛宕山にも時々行きます。公園と違って安全な遊び場所というところではありません。そして、愛宕山は、

公園とは違う自然が広がっています。木がたくさんあることは当たり前ですが、そのために、公園では見られない生き物がたくさんいました。カブトムシやクワガタムシも、公園よりたくさんいました。愛宕山の近くに住んでいる友達がいて、虫がいるポイントなどを教えてくれました。自然の中で新しいことがたくさん知れて、たくさん虫を捕まえることができるようになって楽しかったです。

伊達市には、僕が行って遊んだことがある場所以外にも、たくさん自然があります。でも、正直僕はその自然についてあまり知りません。霊山などの名峰もありますが、近くを車で通ったことしかありません。他にどのような素敵な場所があるのか、もっと知りたいと思うようになりました。魅力ある伊達市をつないでいくためにも、僕たち子ども世代が伊達市の魅力を知る必要があると思います。

僕は、虫取りを通して伊達市の自然に気付き、魅力を感じるようになりました。そして、この自然をもっと知り、大切にしていかなければならないと思います。これから自然を守るために何ができるか考え、実行していきたいと思います。そして、いつまでも楽しく虫取りができる伊達市であってほしいです。

佳作

伊達町をつなぐ長岡天王祭

伊達中学校 二年 渡邊 裕奈

「まもりましょう ふるさとの自然と歴史を」

私がこれを見て一番最初に頭に思い浮かべたのは長岡天王祭です。毎年七月下旬ごろに行われ、各方部から「よいやさー」と大きな掛け声が響き渡り、伊達町に活気をもたらします。たくさんの人々が集まるので、長岡天王祭は伊達町の人々が一つになれる良い機会だと思います。

私は、小学生のころに長岡天王祭に参加したことがあります。自分の住む方部の山車に乗って太鼓をたたいたり、山車を引いて伊達町内を歩いたりしました。休憩をとるために集会所に寄ると、数えきれないほどの人々にぎわっていて、あまりの人数の多さに圧倒させられました。

しかし、ここ数年長岡天王祭は中止となっています。新型コロナウイルス感染症の影響です。人が多く集まるために、中止せざるを得なかったのでしょう。それを聞いたとき、私は悲しい気持ちになりました。去年の七月ごろは、窓を開けていつものように耳を澄ましても、太鼓の音も笛の音も聞こえてきませんでした。

今年もコロナがはやっているから祭りはないだろうな、と考えていた時、近所の集会所から太鼓と笛の音が聞こえてきました。今年も祭りは中止だけど子供たちの太鼓や笛の練習はあるそうです。私は、なぜ祭りは中

止だと分かっているのに、太鼓や笛の練習をする必要があるのかと思いました。

そこで私は考えました。長岡天王祭は歴史ある祭りです。それをコロナがはやっているからといって、歴史を途切れさせてはならないということです。そして、社会がどのような状況にあっても、人々には歴史を次の世代の人達に伝えていかなければならないといった義務があると考えました。太鼓や笛の練習をしている人達の中には子供もたくさんいるはずです。子供たちにとっても、地域の歴史に触れることは貴重であり、とても重要なことであると思います。きっと伊達町の大人の方々は「この長岡天王祭を伝えていかなければならない」と考えて、祭りは開催できなくても、練習だけは継続するべきだと考えて行動に移したのだと思います。いろいろな制約があるこの世の中で、伊達町の歴史を守るために、今自分ができることを考えて行動することができると、より良い伊達まちづくりにつながると思いました。

佳作

伊達のふるさと

梁川中学校 一年 菊池 鳳聖

皆さんは「ふるさと」について、考えたことはありますか。

ふるさととは、生まれ育った土地の事を指しますが、僕はふるさとの事を、「第二の親」だと思っています。ふるさとの自然や歴史などによって、環境も大きく変わり、成長に大きな影響を与えます。

そのように考えると、「今の自分があるのは、ふるさとのおかげ」と解することが出来ます。

だからこそのふるさとについて考え、しっかり向き合うことは、とても重要だと考えます。

僕のふるさとである伊達市は、平成十八年一月一日に、伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月舘町の五町が合併し、誕生しました。

市を表すシンボルである市章は、月と兜がモチーフになっています。これは、伊達市の歴史が関わっていて、かつて伊達氏がこの地に城を築いたためだといわれています。

また、市の花木鳥として、「もも」、「あかまつ」、「せきれい」があります。

ももは伊達市の代表的な特産物として全国的に知られていて、春には薄紅色の美しい花を咲かせます。

あかまつは厳しい自然に耐えるため、末永い繁栄や長寿を表す縁起の良い樹木といわれています。

せきれいは伊達政宗の花押のデザインにもなっていて、この豊かな風土と伊達氏の関わりを次世代に伝えるために、市の鳥となりました。

このように、伊達を象徴するものは、自然豊かな風土、伊達氏の歴史と深く関わっています。そして、それらには「これから伊達市が更に良くなりますように」という願いが込められているのです。

ですが最近では森林伐採や排気ガスの増加、それによる地球温暖化、ポイ捨てなどによる環境破壊によって、美しい自然の景色や愛おしい動物がこの伊達市から少しずつ失われています。

そんな現状を少しでも良い傾向にするのが伊達に生まれ、育ち、過ごしている僕達の役目だと思います。一人一人が伊達を良くしようとする心がけを持つことで、伊達を最高のまちにして、後世へ伝える、それが今の時代に生まれてきた人の、「使命」だと考えます。これからも自然豊かで美しい伊達市に、感謝の気持ちを持って、伊達にふさわしい人間になれるように生きたいと思っています。

佳作

想いを守る

霊山中学校 三年 佐藤 琳

落ち込むことがあった時、私は外へ出て深く深呼吸をする。自然はいつも私に大きなパワーを分けてくれる。そのパワーはさまざまだ。四季折々の景色が瞳に映って、耳をすませば鳥や虫たちが合唱をしている声が聞こえる。豊かな自然で育ったおいしい食物を食べると思わず笑顔になる。私たちは自然に守られて暮らしている。また、自然だけではなく、この自然を守っている方、守ってきた先人の方々などの想いにも守られている。そんな豊かな自然と温かい方々がいるここ伊達市が私は大好きだ。

しかし現在、環境問題が深刻化されている。この自然で世の中の生物たちが生きるためには、他の生物たちに迷惑をかけることが少なからずある。また、逆に他の生物たちを支えていることもある。この支え合う関係が人間と生物の共生で大切なことだと思う。だが、人間が発展のため知らず知らずのうちに、他の生物に多くの迷惑をかけてしまうと、この関係が崩れてしまう。そうすれば、自然を守っている方、守ってきた先人の方々などの想いまでなくなってしまう。

自然を破壊してしまう人間。だが、自然を守ることができるのもこれまた人間。私たちは、自然にたくさんの方々のパワーを分け与えてもらった。そんな自然に感謝を伝えるため、いろんな人の想いを守るために私たちは、生

態系の一部として自然を守る責務があると思う。

では、自然を守るために何ができるのだろうか。まず大切なのは知ることだと思う。自然の大切さを知り、自然を守っている方の想いを知る。伊達市には、自然と触れ合える施設がたくさんあり、学校や地域などでさまざまな活動も行なっている。だから、自然について考える機会が多くある。私も小学校の緑の少年団の活動で植樹祭へ行き、植樹をしたり、地域で伊達のシンボル霊山に登るなどをして自然の力や大切さを身にしみて感じることができた。

自然の大切さを知ったら次は、自然を守るための取り組みについて知ることも大切だ。どんな行動が自然を守ることにつながるか、逆にどんな行動が自然に悪影響をもたらすのかをしつかり知ると実際に行動しやすい。自然を守るための取り組みは、電灯をこまめに消すことやゴミを分別するなど私たちにも取り組める身近なところにもたくさんある。

ただ、いくら自然を守る取り組みをする人が増えても、自然を壊す人がいたら意味がなくなってしまう。また、より多くの人々が力を合わせた方が力は大きくなる。そこで私は、伝えることが大切だと思った。自分の自然を守るために行うことを伝え合うことで、取り組みの輪はどんどん広がっていくと思う。

伊達市の皆さんは、伊達への想いをもっている。その想いがあったから、今の伊達市があると思う。私も伊達市民の一人として、自然と歴史、そしてその想いを守り続けていきたい。

講 評

審査委員長 二瓶 洋允（元学校教育課長）

伊達市の市民憲章作文コンクールの六年目は、「まもりましよう ふるさとの自然と歴史を」という課題でした。これには「豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。」という補足説明が添えられていますが、それらを受けて、小・中学生がどのような観点から課題をとらえ、内容を具体化し、文章としてまとめているかが作文審査のポイントでした。

今年は、市内の小・中学校の協力のもと、昨年より百八十七点多い六百九十五点もの作文が寄せられました。その中から学校推薦のあった三十八点の作品が最終審査に残りました。三人の審査委員により選考が行われた結果、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が、次のように決まりました。

＊

最優秀賞に輝いたのは、伊達東小学校六年の小野瑛士朗さんの「モモのふるさとを守る」と梁川中学校二年の佐藤ゆうみさんの「小さな渦を大きなうねりへ」の二つの作品でした。小野さんの作文は、伝えたいことが明確で、代々続く果樹農家の父から聞いた桃の栽培の歴史や天津桃の活用

法、総合的な学習の時間に伊達の桃の美味しさの秘密などを知ってもらおうとポップ広告を作り、近くの直売所や「んめーべ」に飾ってもらうなど具体的に行動したことをまとめ、桃のふるさとを守ろうと呼びかけています。中学生の佐藤さんの文章は、梁川の四季を見事にしかも豊かに表現しており、梁川の風景や自然の美しさを実感させてくれます。それらを守るために伊達市の一員として何かできることはないかと考え、自らも川沿いのゴミ拾いを行うなどして、地域のゴミ捨て問題の解決のために身近な人と連携して小さな渦をもっと大きなうねりにしていきたいと結んでいます。

優秀賞に選ばれたのは四人の作品です。小学生部門は、伊達小学校六年の唯野柚月さんの「もつと豊かな伊達市へ」と栗野小学校五年の佐藤勇希さんの「大好き伊達市」の二作品です。中学生部門は、桃陵中学校二年の鈴木桜絵さんの「私のすぐそばにあったもの」と月舘学園中学校三年の齋藤日向子さんの「自然に囲まれて」の二作品です。唯野さんは、総合的な学習の時間に身近にある義民斎藤彦内の墓を調べ、大切に受け継がれてきた歴史や功績に触れることができた感動をまとめています。また、後半部では伊達市の豊かな自然を守るため、植林を提案しています。佐藤さんは、サイクリングを通して感じた栗野地区の豊かな自然を素直に描いています。また、梁川町にある梁川城跡をはじめ知り、伊達市の自然と歴史を守り、未来へつなげたいと述べています。中学生の鈴木さんは、生徒会での桃プロジェクト活動の体験をふまえ、伊達市の良さと魅力に気付

かされたことをまとめています。齋藤さんの作品は、月舘町の「あじさい小径」の美しさと地域の人々の思いや努力、星空の美しさなどにふれ、郷土の自然を大切にしたいという思いが込められています。

優良賞を受賞したのは八人の作品です。小学生部門は、大田小学校五年の長沢健太さんの「自然豊かな伊達市」、保原小学校五年の山下紗奈さんの「絹の里伊達市」、上保原小学校五年の山田一歌さんの「未来のものを守る」、掛田小学校五年の渡邊蒼依さんの「つなげよう迫力の霊山太鼓」の四作品です。長沢さんは、金原田の自然豊かな田畑や山、通学路の四季折々の表情をとらえ、地域の人との会話を交えながら豊かに表現しています。山下さんは、伊達市の養蚕業の歴史に関心を持ち、かつての養蚕の様子を聞くなどして理解を深め、伊達市の養蚕業を復活させたいという思いを伝えていきます。山田さんは、祖父が病気になり桃づくりをやめてしまったことから伊達市の農家数の減少と高齢化が進んでいることを知り、桃を育てる苦労や農家の魅力を伝え、伊達の桃を守ろうと結んでいます。渡邊さんは、伝統ある「霊山太鼓祭り」でのたたき手の一人として取り組んできた太鼓を通して、祭りの楽しさや祭りに込める人々の願いや思いを考え、太鼓祭りを守り伝えようとまとめています。

中学生部門は、梁川中学校三年の佐藤濤さんの「守るべき伊達の歴史」、松陽中学校二年の佐藤空道さんの「誇りに思う伊達市」、霊山中学校二年の狗飼梨央さんの「歴史を守る意味を考える」、月舘学園中学校一年の伊東来々さんの「伊達市の未来を守るためにできること」の四つの作品です。

佐藤濤さんは、伊達市と姉妹都市である北海道松前町との関係や松前中学校との生徒会交流事業に参加した体験をもとに歴史や文化を受け継ぐことの大切さを述べています。佐藤空道さんは、伊達市の名称が「伊達氏」と深いつながりがあり、歴史的な建物や場所も多くあることを知り、SNSを活用して伊達市の魅力を発信したいと述べています。狗飼さんは、霊山の歴史を調べて分かったことをもとに、自然と歴史を知り、次に伝えることが本当の意味で「守る」ことにつながると述べています。伊東さんは、伊達市の伝統や文化を守るために、知ること、受け継ぐことという視点から、関心を持つことが大切であるとまとめています。

佳作には八つの作品が選ばれました。小学生部門は、伊達小学校五年の小林愛理さんの「わたしの自まんのふるさと」、柱沢小学校六年の菅野桃冴さんの「環境を守ろう、伊達市」、掛田小学校六年の菅野愛さんの「歴史と伝統のある霊山神社」、小国小学校五年の佐藤凜さんの「ホテルが飛ぶふる里」という四作品です。中学生部門は、伊達中学校一年の小野将さんの「遊べる自然」、伊達中学校二年の渡邊裕奈さんの「伊達町をつなぐ長岡天王祭」、梁川中学校一年の菊池鳳聖さんの「伊達のふるさと」、霊山中学校三年の佐藤琳さんの「想いを守る」という四作品です。小・中学生のいずれの作品も伊達市の自然や伝統文化、歴史などに目を向け、体験等をふまえ、その良さを具体的に表現しています。地域の人々の思いや願いをしっかりとらえ、次の世代に受け継いでいこうという強い思いが伝わってきました。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを

市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立って行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和4年1月